

## 「客人」から客家へ —エスニック・アイデンティティーの形成と変容—

田上 智宜

はじめに

第1節 台湾の「客人」

第2節 客家意識と「尋根」(ルーツ探し)

第3節 客家意識の顕在化

おわりに

(要約)

台湾における客家に関する言説の量的・質的変遷は、台湾社会そのものの変化と強く連動していた。中原から移住してきたという「歴史」を核とするエスニックな概念としての「客家」は、国家的危機に際して中国ナショナリズムの植え付けを意図する文化政策が推進される時代において流通したものであり、それを受け入れた結果、台湾の「客人」は自分達のことを客家と認識するようになる。一方、民主化が達成された後に客家意識は客家運動という形で顕在化するが、この運動は台湾を地理的範囲とし、民主化運動に端を発する台湾ナショナリズムの影響を強く受けたものだった。台湾において客家アイデンティティーは、戦後から民主化後に至るまでの台湾における政治状況の変化や社会的な価値の転換を背景として形成や変容が生じたものであり、政治的・社会的な要因に適応する柔軟性を持つものであった。

はじめに

客家に関して初めての本格的な研究は、1933年に出された羅香林『客家研究導論』であった。羅香林は、当時の客家の出自に関する言説として、苗蛮の別支、古代越族の後裔、具体的には特定できないがただ漢族とは同種でないとするもの、純粋な漢族、という4つを挙げているが<sup>1</sup>、客家が中原漢族の末裔であることは疑う余地のない事実とし、族譜を主な資料として客家が中原から移住してくる時期や経路について説明している。羅香林の主張した、中原から華南へ移住してきたという客家の「歴史」は、その後たびたび引用され、同書は客家研究のバイブル的存在になっていく。それは台湾においても他の地域においても同様である。そのためこれまでの客家研究の多くは、この中原起源の「歴史」に大きく依存し、固定的な客家像を作り出してきた。

台湾において客家人は、「隠形人」(透明人間)と称されることがあるように、社会の中で目立たない存在であったが、1988年12月28日、台湾の客家人は台北に集まり、「母語を還せ、客家語を還せ」と訴えて行進した。このデモ行進は客家運動と称される社会運動の中で、最も規模が大きく社会的にも注目を集めた象徴的な出来事だった。彼らは確かに客家人としての強い自意識を持ち、客家の權益を主張していた。

本稿では、各時代における客家言説、特に移住の歴史に関する言説の変遷を、それに影響を与えた社会的要因とともに分析する。さらに、台湾で客家意識が顕在化した1980年代後半からの客家運動において表明された主張を追うことで、現代台湾における客家アイデンティティーの形成・変容の様子を明らかにしたい。

## 第1節 台湾の「客人」

現代の台湾において、「客家」という用語は定着しており誰でも知っている言葉であるが、戦前までの台湾では客家人の自称は「客人」(hak-ngin)、客家語のことは「客話」(hak-fa)と呼んでおり<sup>2</sup>、「客家」という用語は主として戦後用いられるようになったものである<sup>3</sup>。また、これはホーロー人からの呼び名も同様で、ホーロー語で客家人、客家語を表す名称もまたそれぞれ「客人」(kheh-lang)、「客話」(kheh-oe)というのが一般的であった<sup>4</sup>。

もちろん「客家」という語が戦前には一般的でなかったというのは台湾に限っての話であり、他の地域においては必ずしもそうとはいえない。本稿は台湾を対象地域としているため深くは立ち入らないが、香港や広東省で活動していた宣教師は19世紀後半には既に「Hakka」の語を用いている。例えば中国を始めとする東アジア、東南アジアの西洋人向けに発行された1872年8月創刊の英文雑誌 *The China Review* では、アイテル(Ernst Johann Eitel)、ピトン(Charles Piton)、ダイヤー・ボール(James Dyer Ball)らが盛んに「Hakka」に関する記事を執筆しており、彼らの著作は羅香林やその後の客家研究者の著作の中でも引用されていくのである。

ここではまず、日本統治期に実施された戸口調査、国勢調査を基に、当時の台湾において客家がどのように把握されていたか考えてみたい。台湾では1905年に臨時戸口調査、1915年に第2次臨時戸口調査が実施された。これは台湾総督府によって独自に実施され、台湾だけを調査範囲としたものであったが、1920年からは「内地」の国勢調査と一体化し5年おきに1940年まで実施された。台湾総督府も台湾の複雑なエスニシティの状況には意識的であり、人口や性別、年齢、職業などとともに、「種族」や「言語」を1つの項目としてあげそれぞれ調査している。この調査では、「種族」の項目で本島人のうち漢人を「福建人」「広東人」「其ノ他ノ漢人」に分類し、「言語」の項目では「土語」として、「福建語」「広東語」「其ノ他ノ漢語」「蕃語」の4種類を挙げている。ここでは「広東人」「広東語」という用語を使用しているが、もちろんこの「広東語」というのは客家語のことであり、「所謂客人語ニシテ広州語ヲ含マズ」と説明している通り広州語を代表とするいわゆる広東語ではないということは認識されていた<sup>5</sup>。

日本統治期の台湾において現在客家と呼ばれる人々は、文献上の名称としては「広東人」「広東族」「粵人」「粵族」などが多く、「客人」や「客民」「客仔」「客家」などの名称も使用されていた。例えば伊能嘉矩『台湾文化志』(1928)では、主に「粵属」や「粵人」という用語を用いている。また連横『台湾通史』では、「閩人は先に来たため、粵籍を『客人』と称し、一方粵人は閩籍を『福老』と呼び、風俗は同じでなく、言語もまた異なっている」とある<sup>6</sup>。このように書き言葉としての名称は多様であるが、話し言葉としての自称は「客人」が最も一般的であったと考えられるため、本稿では、台湾で「客家」という名称が一般的でない時代の、現在「客家」と呼ばれている集団を表す名称として、「客人」を使用する。

では、日本統治期の文献には「客人」はどのような集団として描かれているのかということについて検討してみたい。李坪生は「広東婦人(粵族)」と「福建婦人(閩族)」の異なる点として、「婦人の労働」「髪のかき方」「纏足」の3点を挙げている<sup>7</sup>。纏足をせず、女性も労働するという記

述は、このほかにも多く見られるが、「客人」がこのような生活習慣を持っていたということと、中原から移住してきたという「歴史」とが結び付けられて説明されているわけではない。領台初期の文献では「客家」という語を用いているものも幾つか見られる。1896年に出版された小川琢治『台湾諸嶋誌』には次のような記述がある<sup>8</sup>。

支那移住民の中に客家 Hakkas（一に客仔若くは哈喀に作る）と称する種族あり、其容貌風俗一見すれば他の支那人と異なる所なしと雖も、他の支那人は之を別個の種族と看做すなり、此種族は広東地方に多く居住するも土着の人民は之を外来の種族として排斥す、客家なる名称の起因是にあり、此種族の特性は慄悍勤勉にして能く勞役に耐え困苦を冒すを以て、粗暴の蕃民と界を接して村落を造り、而して之を抑制し、其地を蠶食して疆域を拡張し、且つ此種族に限り土人と結婚するを嫌はざるを以て、増殖甚だ盛にして、支那移住民中殊に速に膨張するものなり、……近時我師に抗し、頑妄の挙ありし土匪なるものは大抵此種族に属す此種族は争を好み、屢々清廷に対して一揆を起せることあり

広東省で布教していたピトン<sup>9</sup>による広東の客家に関する記述を大量に引用しているように、小川の客家に関する知識、特に大陸の客家に関する知識はかなりの部分ピトンによっている。また、女性が纏足をしないということや勤勉な性格であるという描写は現在の客家像とも共通するが、興味深いのはしばしば一揆を起し、日本だけではなく清朝に対しても反抗的な集団として描かれている点である。これは、分類械闘などで清朝の側につくことが多かったと認識され、「義民」というのが客家の象徴にすらなっている今日からすると大分異なったイメージである。

また『台湾慣習記事』に、ある著書の客家という名称に関する記述を批判したものが掲載されている<sup>10</sup>。具体的な書名や著者名は明記していないが、「兎に角に有力なる方面の手に成れる、台湾事情を記したる書」において、「客家といふものあり、或は曰く、土人と蕃人との雑種なりと云々」という記述があるという。これに対して「勿論、客家の中には、この雑種児の存在すること事実ならんも、之を以て、客家即ち民蕃雑種の総体なりと断定するは、論理上決して許すべからざるなり」として、「客家とは何ぞ、言ふまでもなし、閩族が粵族を指して称する他称的人族語なり」と結論付けている。客家とは「閩族が粵族を指して称する他称」であるというこの主張が果たして正しいのかどうかという議論はさておき、「客人」は漢人と原住民の混血であるという説が、有力な人の書いた台湾事情に関する書に載っていたというのは興味深い。

類似した記述は参謀本部編纂課編輯『台湾誌』にも見られる。「客家（一ニ哈喀）ト唱フル種族アリ。最モ此ノ客家ハ一目シテ支那人ト異ナル所ナシ。然レトモ支那人ハ別個ノ種族」と看做していると<sup>11</sup>、さらに、「台湾各地方ニハ此ノ客家ナルモノハ頗ル多ク、純粹ノ支那人トハ常ニ相和セス争鬪絶ユルコトナシト云フ。而シテ客家種族ノ住所ハ恰モ生蕃地ト支那人居住地ノ中間ニ在リテ、専ラ農作ニ従事ス。支那人ハ俗ニ内山ノ客人ト云フ」と述べている<sup>12</sup>。ここでも客家は野蛮で好戦的な集団として描かれ、血縁的に、あるいは文化的に原住民とのつながりが少なくないということが記述されている。

では、移住の歴史に関する記述はどのようなものがあるだろうか。上述小川琢治『台湾諸嶋誌』には、ピトンが大陸で調査した内容に基く、出自に関する次のような記述がある<sup>13</sup>。

客家は自ら其祖先寧化（福建省の西部）のシャクピャク Syakpyak より来たれりと称す、其現に住する所は広東省の東北部嘉応州にして、其口碑を考ふるに此処に移住せる後殆と一千年に近きなり

このように領台初期のものは、欧米の文献を参照し記述しているところが少なくないが、時代が下るとそのような記述はあまり見当たらなくなる。1931年の『日本地理風俗大系 15 台湾篇』では「漢系本島人風俗」で次のようにある<sup>14</sup>。

約三一〇万人は福建省の泉州府漳州府及び広東省の潮州府九県中の八県より移住した者の子孫で、これ等を閩族と称し、約八十万人は広東省の惠州嘉応州及び潮州九県中の一県から移住せし者の後でありこれを粵族といふ。

辮髪は共通であつたが纏足の習慣は閩族のみに存するところであり、また女子の名の称呼においても閩粵は異なつたものがある。……粵族の婦人は農事商事において家庭的に男子同等の権限を有する。また両族は言語を別にすること勿論である。

閩族は粵族に先んじて渡来し、必然に有利の地方を開拓したが、粵族は山地に近い不利のところまでも入り込まねばならなかつた。現在の分布状態は大体において、粵は新竹州及び高雄州下潮州郡にあり、その他は多く閩族の占めるところとなつてゐる。

ここでは、風俗習慣については「閩族」と「粵族」の違いが少なからず存在していることが書かれているものの、移住の歴史に関しては、「閩族」が主に福建省から移住してきたと書かれているのと同様に、広東省から移住してきたことが述べられているだけで、中原から南遷してきたということが「粵族」の歴史として描かれてはいない。

このように日本統治時代の「客人」に関する言説は、時代によって描かれ方が多少異なっているものの、中原から移住してきたという「歴史」はほとんど見ることはできない。移住の話では、多くは広東省から来たということが述べられているに過ぎず、羅香林の語ったような客家像が、台湾の「客人」の間で共有されていたとは考えにくいのである。

## 第2節 客家意識と「尋根」（ルーツ探し）

『客家研究導論』で羅香林が強く主張したのは、客家が中原漢族の文化を守りながら中原から華南に移住してきたという「歴史」であった。また、これは現在客家について語られる時に必ずと言ってよいほど採り上げられる「歴史」でもある。しかし、上述したように戦前までの台湾においては「客家」という名称は一般的ではなかつたし、中原から移住してきたという「歴史」も

文献上からはほとんどどうかがい知ることにはできないのである。

もちろん族譜を資料として持ち出すと、そのほとんど全てが中原漢族の上流階級にまで遡るだろう。羅香林『客家史料匯篇』では客家が中原の出であることを示す史料として、各地の族譜を大量に紹介しており、その中には台湾の客家にも触れている箇所がある。しかし、「族譜はたんに祖先を記憶し、記念するために作られた産物ではなく、「みずからのアイデンティティを問い、中国社会のなかでその正統性を主張するための政治的な作品なのである」<sup>15</sup>。また、虚構性という問題を差し引いたとしても、族譜というはある一族の移住史を語っているものではあるが、決して台湾の「客人」全体の移住史を語ってはいないのである。

そうであるにもかかわらず、現在の台湾において客家について語られるときには必ずといってよい程、中原から移住してきたという「歴史」が述べられる。そのため、そのような客家の「歴史」が、台湾において「客人」の間でどのようにして共有されていったのか考える必要があるだろう。そこで本節では、台湾の「客人」が、中原から移住してきたという「歴史」を軸としたエスニックな概念としての「客家」を、どのような形で受け入れ、新たなエスニック・アイデンティティを構築していったかという問題に焦点を当てる。

詳しくは後述するが、客家に関連する資料が顕著に増加するのは1970年代以降のことであり、それ以前にはごく僅かしか存在していない。少なくとも出版物で見ると、客家に関連する資料、特に客家の「歴史」に関する記述が多く見られるようになるのは、ごく最近の話である。

本節前半では、戦後台湾における文化政策、特に歴史に関係する政策について考察する。それは、中原から移住してきたという客家の「歴史」に関する言説が流布するにあたっての社会的環境という意味で大きな役割を果たしているからである。戦前の日本統治下の学校教育では日本史が国の歴史として教えられていたが、戦後になると国民党政権下の学校教育において中国史が同様に国の歴史として教えられるようになった。そして、両者ともにおいて台湾の歴史はほとんど扱われることはなかったという点で共通している。また学術研究においても、1980年代以前の台湾においては台湾史について自由な研究を行うことはできず、「大中国主義を中心とした史観がほとんどすべての研究成果に影響を与え」ていたのである<sup>16</sup>。その一方で、国民党政権にとっても台湾史というのは台湾の統治を正当化するという重要な意味を持っていた。すなわち、台湾史を中国史の1地方史として描くことによって台湾が中国の一部であることを示し、正統な中国の国家たる中華民国が台湾を統治することの歴史的な正当性を立証し、そのような歴史観を台湾人に浸透させることは国民党政権にとって非常に重要だったのである。

歴史に関係する文化政策の具体的事例として、戦後台湾において歴史に関する事項の整理、収集という役割を担っていた文献委員会、そして主に台湾史跡源流研究会（以下、史跡会）によって実施された「尋根」（ルーツ探し）の活動をとりあげる。この「尋根」というのは、それに内在する歴史観が、ルーツが中原にまで遡るといふ客家の「歴史」との共通性ゆえに重要な意味を持つのである。

また、本節後半では戦後台湾、1980年代に民主化が達成され客家運動が発生する以前の時代において、客家に関する叙述がどのように展開されてきたか、特にその「歴史」に関する言説を中

心に分析する。

## 1. 戦後文化政策における歴史

### (1) 文献委員会の設置

台湾省文献委員会の前身である台湾省通志館は、1948年4月24日に出示された台湾省政府令「台湾省通志館組織規程」を受け、同年6月1日に設立された。台湾省通志館が設立された理由について黄文瑞は以下のように述べている<sup>17</sup>。

日抛以前の台湾史文献は、ばらばらに散逸しており、保存・収集が急務である。日抛時期の歴史文献は、多くは民族的偏見にとらわれており、……当然鑑別をし、選り分けて留めるかどうか決めなければならない。そこで台湾省通志館を設立し、台湾の歴史文献を整理し古物古跡を探し保存することで、省通志稿編纂の始めとする。

文献事業とは、「そもそも一種の固有文化を保存、整理する事業」であるが、「時代的、社会的意義から言うと、新しい文化を受け入れ融合させ、加えて伝統文化を発揚する事業」だったのであり<sup>18</sup>、「文物古跡を保存し歴史文献を整理することは、民族文化を守るための最も重要な事業の一つ」と考えられた<sup>19</sup>。

台湾省通志館は設立から1年程で台湾省文献委員会へと改組される。1949年に省主席は魏道明から陳誠に引き継がれたが、陳誠は特に台湾の歴史文献に関心を持ち、「文献の持つ意義は廣大深遠であり、一通志所が担当できるものに非ず」と考えていたことから、台湾省文献委員会への改組には彼の意向が関わっていたものと思われる<sup>20</sup>。同年5月13日に「台湾省文献委員会組織規程」が公布され、7月1日に台湾省文献委員会は正式に発足した<sup>21</sup>。

台湾省通志館は、台湾省通志の編纂とそれに付随する台湾史関係文物の収集・整理を行っており、その役割は台湾省通志の編纂という目的にかなり限定されていたが、台湾省文献委員会に改組された後は、単なる通志の編纂以上のことが求められるようになった。通志の編纂に関わらず、広く台湾の歴史や文化に関連する文献やその他の資料を収集し、台湾省通志として或いはその他の歴史関係書籍として編纂、出版する。さらには台湾の政治・経済・歴史・社会・風俗習慣に至るまで幅広く調査・研究する役割も担うようになった。

### (2) 「尋根」——史跡会によるルーツ探し

1970年代、国民党政権は重大な対外的危機に見舞われる。1960年代末から、それまで中華民国の存在を国際社会においても、また中華人民共和国との関係においても守ってきたアメリカが、中華人民共和国に接近を始めた。そして、1970年代には日本を含む主要国が次々と中華民国と国交を断絶するという事態になり、国連からも脱退した。このような対外危機さらには1975年の蒋介石の死去が重なっていく時期において、国内では知識人らによる国会の全面改選といった改革要求も強まるようになり、国民党政権はより一層中華民国の正統性そして国民党政府によ

る台湾統治の正当性が求められ、中国ナショナリズムを更に強化する必要性を感じるようになった。

このような状況の下、史跡会による「尋根」（ルーツ探し）の活動が開始された。これは1970年に台湾史講習会という名称で開催されて以来、幾度か名称を変更し、以前とはその役割を変えながら現在も続けられている。

史跡会につながる活動として、1969年10月9日から約3ヶ月間国立歴史博物館において、各地の文献委員会と国立歴史博物館との共同開催による「中原文化と台湾」という特別展示が行われた<sup>22</sup>。開幕式の当日には立法委員長の黄国書がテープカットに訪れ、台北市長の高玉樹が祝辞を述べたが、その中で以下の事を再三強調したという<sup>23</sup>。

この世界には台湾居民しかなく、「台湾人」などというものは無い。この世界に第2の中国は存在せず、台湾はすなわち中国であり、中華民国の1省である。これをもって台湾居民はすなわち中国人であり、中華民族のれっきとした子孫だということである。もしこの道理すら理解できないというのなら、一体豚や犬と何の違いがあるのか。

台湾省立博物館館長の劉衍と台湾省文献委員会主任委員の張炳楠は、台北市文献委員会執行秘書の王国璠と連絡し、「中原文化と台湾」特別展の後継事業として台湾史講習会を開くことを計画する<sup>24</sup>。ただし台湾史講習会の概念自体はもともと中国青年反共救国団（以下、救国団）執行長の宋時選が打ち出したものであるという<sup>25</sup>。そして開催に向けて救国団総団部に支援を申し入れたところ、台湾史講習会を救国団の青年自強活動体系に組み込むことが承諾され、この活動は救国団の支持の下で行われることになった<sup>26</sup>。そして台湾史講習会は1970年8月6日から5日間、歴史系の学生を対象として東呉大学で開催された。

その後毎年夏に開催され、1973年には名称が台湾史跡研究会に変更された。1976年からは台北市文献委員会と台湾省文献委員会がそれぞれ個別に台湾史跡研究会を開催するようになり、冬期は台北市文献委員会が単独で台北で開催し、夏期は台北市文献委員会が台北、台湾省文献委員会が台中で同時期に開催することになった。さらに、1978年には名称が台湾史跡源流研究会へと変更されている。

史跡会での講座の一部には直接は台湾史と関係のない内容も含まれていた。それは救国団の青年活動において等しく実施された愛国教育であり、救国団の人員が担当する政治的な内容のものであった。また、歴史を扱う一般的な講座の内容は、地縁や血縁、文化、風俗習慣などの全てにわたって大陸との関係の深さを強調するものであった<sup>27</sup>。救国団による愛国教育であれ、一般的な歴史の講座であれ、これらの課程の目標は主に民族精神教育に向けられており、史跡会はこの2種類の課程を通して中国と台湾の歴史淵源を繰り返し述べ、規定の枠組みの下で「台湾史跡源流」を探索するものだったのである<sup>28</sup>。

次にこの活動の実施規模について言及しておきたい。まず日数についてだが、台湾省文献委員会の開催した活動の日数でいうと、1970年から1975年までは5日間、1976年から1988年ま

では10日間(1977年のみ7日間)、1989年と1990年が9日間、1991年からは7日間となっている<sup>29</sup>。参加者数では、この活動が始まって間もない1970年代前半の参加者数は最も多い年でも128人、他は全て100人以下であるが、1976年以降は参加者が急増し、1980年代中盤まで参加者は軒並み500名以上を数える。開催日数にしてもやはりこの時期が最も長く、開催日数・参加者数いずれを取ってもこの約10年が最も積極的に活動していた期間であるということが分かる。

史跡会が多くの参加者を集め、継続的に開催していくことができたという事実について2つの側面から考える必要がある。1つはこの活動を開催する統治者側の意図であり、もう1つは参加者の側の意図である。確かに史跡会の活動は強烈な中国ナショナリズムによる歴史観に基いており、台湾の源流は全て大陸にあると強調し、台湾の歴史に主体性を認めないものであった。これは国際的な危機に陥った国民党政権が台湾統治の確かな正当性を明示すべく、台湾史を大中国主義的歴史観によって説明し、台湾人に対して中国ナショナリズムを浸透させることを意図した活動だったといえるだろう。

一方で、多くの台湾人が自ら進んでこの活動に参加していたこともまた事実である。参加費が安かったということや、救国団自強活動へ参加する人数自体が多かったということもあるとはいえ、多い時期には毎年500人以上という多数が参加していたばかりか、参加したくても定員に達してしまい参加することのできない者も多かったという<sup>30</sup>。その要因となったのは台湾人の台湾史に対する興味に他ならない。史跡会は、台湾の歴史文化に興味を持つ人に、情報監視機関から疑われずに台湾史に触れることのできる機会を提供するという保護膜としての役割を担っていたのである<sup>31</sup>。このように史跡会の活動というのは上からの中国ナショナリズムの植え付けという意図と同時に、台湾人自身の台湾史に対する関心によって支えられていた。そして両者は同じ台湾史という題材を扱いつつも、それに対する認識や態度は必ずしも一致することはなく、この活動を成り立たせていたのである。

## 2. 「客家」という概念の流通

本稿における「客人」と客家の違いは、単なる呼び名の違いにはとどまらない。重要なのは「歴史」を核としたエスニックな概念としての「客家」を受け入れているか否かである。つまり、羅香林の主張に代表される、中原から移住してきたという「歴史」を自分達の歴史であると認識するようになることで、「客人」は客家になるのである。

では、現在の客家アイデンティティーを成立させるのに不可欠な要素である客家の「歴史」は、いつ頃から台湾の「客人」の間で共有されるようになるのであろうか。ここでは、戦後の台湾において客家に関連する文献資料がいつ頃、どのように現れるか、またどのように客家が描写されているかということを参考に、「客家」という概念の流通について考えてみたい。

### (1) 客家関連資料数の推移

『台湾客家関係書目與摘要』では戦後に出された客家に関する著作や文章を収集し、年代ごと

の数量の統計を掲載している。この本に収録されているのは1998年6月までに台湾で発表された中国語の専門書、学術論文、学位論文、研究報告、政府の文献であり、外国語の文献の中国語訳も含んでいるが、文学作品は収録していない<sup>32</sup>。

それによると、各年代に発表された客家に関する資料数は以下のようにになっている。

(表) 年代別客家関連資料数

|             | 1940-50s | 1960s | 1970s | 1980s | 1990s | 合計   |
|-------------|----------|-------|-------|-------|-------|------|
| 専門書、論文、研究報告 | 42       | 462   | 828   | 1371  | 3122  | 5900 |
| 『中原文化叢書』    | 0        | 403   | 447   | 186   | 0     | 1038 |
| 学位論文        | 0        | 7     | 16    | 52    | 69    | 144  |
| 地方志         | 225      | 517   | 310   | 186   | 216   | 1460 |

出所：陳逸君主編『台湾客家関係書目與摘要（専書、論文、研究報告類）上冊』1998年、34、35、38-39頁、陳逸君主編『台湾客家関係書目與摘要（方志類）』1998年、3頁。

注：「専門書、論文、研究報告」の数値は『中原文化叢書』のものも含む。

この統計からは、戦後初期の客家関連資料は多くが地方志の中の文章であることが分かる。一方で、「専門書、論文、研究報告」は、1940年代は8本、50年代は34本というように非常に少ない。60年代では462本と漸く増加する。ただし、60年代の資料のうち403本は中原苗友雑誌社からシリーズで出された『中原文化叢書』第1集から第7集に掲載された資料であり、それを除くと59本とやはりごく僅かにとどまっている。しかし1970年代になると828本（うち『中原文化叢書』は447）と目だって増え、80年代、90年代はそれぞれ1371本、3122本とあるように、客家に関連する資料が近年急激に増加していることが数字の上でもはっきりと見て取れる。

ただしこの統計は若干注意する必要がある。この本ではまず「総類」「移墾」「産経」「政治」等といった11項目に分類され、それぞれがさらに小さな項目に分類された上で、小項目ごとに関連する資料を集めて掲載してあるため、複数の領域にまたがる内容の資料は何度も登場してくる。例えば、盛清沂「台湾省五十四姓先世南渡考」という資料の場合、「移墾」という項目の「歴史源流」、「姓氏源流與祖籍」、それに「社会」という項目でも登場し、統計では重複してカウントされている。

「専門書、論文、研究報告」のうち1940年代、50年代に出された資料を調べてみると、客家そのものを主たるテーマとしている文章はほとんどない。例を挙げると枱台山『台湾概覽』、宋家泰『台湾地理』、韓棐、鄭伯彬編『台湾』、呉幅員「台湾経済年表」のような台湾全体の歴史や地理に関する資料である。これらの資料はいずれも台湾全体を概説したものであり、その中において客家に関連する事項にも触れられているという程度であろう。あるいは黄氏族譜纂輯委員会編輯『黄氏族譜』や陳德輝『新興的苗栗』のような客家の人物や一族、村や町を扱った文章である。これらの資料は客家に関連してはいるが、客家を1つの集団にとらえそれについて言及しているものではない。

## (2) 1960年代までの叙述

1960年代までの客家関連資料で多いのは地方志であった。それでは、それらの地方史の中で客家はどのように記述されているのであろうか。確かに地方史の中に出現する客家関連資料は少ないが、直接的に客家というエスニック・グループに関して言及しているものは非常に少ない。

『台湾省通志稿』「人民志語言篇」では、台湾人の言語に関して言及する中で、台湾の言語集団として「閩南系漢族」と「客家系漢族」を挙げている。それ以外の箇所では「客家系人口の分布地域は、多くは高地に偏っており、数十年来見聞するに及んで、各大都市では閩粵雜居の印象は少ない」、などの若干の記述があるだけで、客家の源流については特に言及されていない<sup>33</sup>。

一方で、僅かではあるが、客家の「歴史」について書かれているものもある。『屏東県志』「卷ニ人民志」では、氏族に関する記載の中で、「漢族中の『客族』、通常は『客家』と称する。……国史と各姓氏族譜の記載によると、客家先民は昔から北方の陝西、山西、河北、山東、河南などに住んでいた人々である。東晋から隋唐以後、外族の蹂躪に遭い乱を避けて南遷し、現在華南7省や台湾などの地に住む客家人がこれである。」とあるように、羅香林の主張した客家の「歴史」に言及しているものもある<sup>34</sup>。

「専門書、論文、研究報告」の中で、客家に関する事柄を専門的に扱った書籍として最も初期に出されたものは、1965年から出された『中原文化叢書』であろう。これは1962年に苗栗県民を対象として刊行された『苗友月刊』、そして『苗友月刊』から雑誌名を変更し全国性の雑誌として1963年に刊行された『中原』の両雑誌に収められていた資料を整理し出版したものである<sup>35</sup>。それではこの『中原文化叢書』ではどのような歴史が語られたのだろうか。『中原文化叢書(一)』の「緒言」は次のように始まる<sup>36</sup>。

客家民族はもともと中原の地に住んでいた。晋王室が東遷して以降1600年、五胡、遼、金、蒙古の乱によって中原貴族は徐々に南へ移り、ついには両広、福建に至り、客家となった。……中原文化は、客家先民のおかげで、消滅を免れ、今日各地の人民の操る言語、守っている風俗は、悉く皆漢族の旧いものである。

このように歴史観については、羅香林の示した「歴史」と同じものが述べられていることがはっきりとわかる。陳逸君によると『中原文化叢書』の内容は以下のような特徴を有していた<sup>37</sup>。

- ① 当時の客家人の「心は中原を向く」という懐古的な心理状態を反映：叢書中では再三客家人が正統な中原身分であることを強調し、同時に客家の言語と文化が中原の特質を最も多く保存していることを誇る。
- ② 現実から乖離した保守的な心理：中原や故郷を描写した懐古的な作品がたびたび現れ、年中行事などの面でも全て中国の原居地の風俗を描写したものが主である。
- ③ 祖先の榮譽への過度の心酔：続けざまに中国歴史上の忠臣、文人、賢士を声高に謳い、これらの人物の逸話や物語について記述する煩は厭わないが、台湾の各方面の傑出した人士にはあまり注意が払われていない。

- ④ 客家族群の民俗文化に対して過度に楽観的な態度であり、当時の客家の社会や政治の問題はほとんど触れられず、生活している土地に関心に向けた論著がない。

このように『中原文化叢書』の内容はほとんどが、大陸の事柄について扱ったものであり、歴史に関係するものでも同様にほとんどは、中原から南遷してくるという「歴史」を述べたものである。台湾に関するものでは、いつ頃、大陸のどのあたりから移住してきたかという記述が若干ある程度で、台湾に移住した後の歴史はほとんど顧みられていない。戦後台湾に渡ってきた外省人の中には、広東や福建出身の客家人も多く含まれている。『中原文化叢書』の編集も、梅県出身の謝樹新などそうした大陸出身の客家人によってなされたのであり<sup>38</sup>、台湾の事象にはあまり目が向けられなかったのかもしれない。

### （3）客家言説の変化とその意味

上述したように客家に関する記述が明らかに増加するのは、『中原文化叢書』を除くと1970年代に入ってからのことである。民主化後にはその数は更に激増するが、ここで民主化する以前の台湾における客家に関する叙述ということで、1978年に出された陳運棟『客家人』をとりあげてみたい。この本は羅香林『客家研究導論』と共にその後しばしば引用されることになる著作である。その「結論」には次のようにある<sup>39</sup>。

客家人はもともと中原の漢族であった。高名な歴史学者羅香林教授の考察によると、彼らははじめ山西、安徽、河南、湖北一帯に住んでいたが、歴代の外患、飢饉、匪盜、戦災、それから政府の奨励、召集、配属、外地の経済などの要因によってちりぢりに南遷してきた。……本書を執筆するのは全て「大漢客属の義勇堅貞を發揚し、進取の優良伝統を開拓し、團結協力を進めることにより、社会集団のために最善の奉仕をし、先祖後代のために最大の貢献となさせる<sup>40</sup>」という崇高な理想を体現するためであり、客家人の過去の光榮なる史実を振り返ることによって客家人の堅貞奮進の民族精神を發揚する。

このように陳運棟の客家研究に対する立場は基本的に羅香林のものを継承しており、客家は中原漢族が南遷してきた優秀な集団である、ということを強く信じ、様々な方面からそれを証明しようとする。客家の出自や移住の歴史に関しては多くは羅香林に依拠し、その他の研究者の見方も紹介することで客家の「歴史」を説明している。この点に関しては先に挙げた『中原文化叢書』と大差ない。では本書の内容はどのような点において、以前の客家に関する記述と異なっていたのだろうか。

羅香林『客家研究導論』で最も重要なのは中原から華南へという客家人の移住の「歴史」であり、その先、つまり台湾や香港、東南アジアに渡っていったことについてはあまり触れられていない。台湾の客家人に関して言うと、第三章「客家的分布及其自然環境」で台湾の事情が紹介されているが、「台湾には純客住県はない。非純客住県として、彰化、諸羅、鳳山の3県がある。これらの客人は皆清初に広東から移住した」といった僅かな記載があるにとどまっている<sup>41</sup>。他

の箇所でも第五章「客家的文教上」において台湾民主国やその後の抗日武装闘争に関して若干の記述があるだけである<sup>42</sup>。また、『中原文化叢書』でも台湾に関する事象にはほとんど触れられていないということは既に述べた通りである。

一方で、陳運棟『客家人』は台湾に関する記述においては違いが見られる。彼は「台湾省に係る資料は手に入りやすいので」という理由を付した上で<sup>43</sup>、台湾の客家人の状況について1節を立てて比較的詳しく紹介し、それまでの客家に関する記述ではほとんど扱われてこなかった、華南地方から台湾への移住、開拓などの歴史にも紙幅が割かれている。そこでは台湾の客家の祖先がいつ頃、大陸のどの地方からどのようにして台湾に移住し、台湾のどの地方に住みつき、人口はどのくらいで、どのような歴史を経てきたかということなどが述べられている。つまり、ここでは羅香林以来の中原から華南へという客家全体の「歴史」に追加される形で、台湾客家に共通する歴史が示されたのである。もちろんその部分だけ特に重点的に述べられているわけでもないし、陳運棟自身が、台湾客家の歴史を描こうという意図を持っていたのではないだろう。ただ、台湾を範囲とした客家の歴史というのは従来ほとんど書かれてこなかった内容である。そして、民主化以後にはこのようなものは急激に増加し、個人の研究者によるものが多く登場するようになるだけでなく、『台湾客家族群史』の編纂にみられるように、政府機関の予算も配分されて研究が進められるまでになるのである。そのような台湾を範囲とした客家叙述がこの時期に登場してきたということは何を意味しているのだろうか。

1970年代というのは、国家的な危機に瀕した国民党政権が台湾の統治を継続するために、以前にも増して強い中国ナショナリズムの必要性を感じていた時代であった。その中であって史跡会は、台湾史は中国史の地方史に過ぎず台湾の源流は全て中国にあるということを強調することを目的として開催され、大中国主義的歴史観を植え付けることにより中国ナショナリズムの浸透を意図していたものであったと考えられる。一方でエスニックな概念としての「客家」は、中原の漢族が南遷してきたという大中国主義的な「歴史」を中心とするものであり、中原から華南地方を経て台湾へという移住ルートによって台湾と中国との関係を明確に意識できるものであった。このような客家の「歴史」は、中原にルーツを求めるという点において、国民党政権の側がその時代に必要としていた大中国主義的な歴史観と一致するものだったのである。当時はまだ統治者側のイデオロギーに沿わない歴史は許されなかった時代であることから、客家の「歴史」は国民党政権に許された歴史だったということができよう。

もちろんこのことをもって中原から移住してきたという客家の「歴史」に関する言説は国民党政権が意図的に広めたのだといっているのではない。また、客家に関して論じている者が全て国民党寄り人間だったと評するつもりもない。さらに、客家研究ということでは、日本や欧米における研究成果の影響は決して無視できないものがある。日本では中川学が早くから客家に着目し関連する論考を数多く発表している。例えば羅香林の歴史意識に対して、「歴史事象は、正統論の正当化のために編成され、動員される」と批判している<sup>44</sup>。また、台湾出身で客家人の戴国輝は、客家人としての強い誇りを持っていたという父親とのやりとりや、自身の客家人としての体験から出発し、客家のルーツに関して、「中原にまつわる『事実』はどうしてもよかったのだ。客家

のわれわれ自身が、客家のルーツを中原に、客家意識もしくはより高い次元の客家精神を中原崇正精神とする信念をもっていることが、客家のわれわれ自身にとっての、何よりの『真実』なのだ。」と、やはり冷静に分析している<sup>45</sup>。また、欧米の研究者では漢族社会について研究していたコーエン（Myron Cohen）やパスターナク（Burton Pasternak）が、当時の政治的状況によりフィールドワークが実施できなかった中国の代替地として、台湾の美濃や打鉄の研究を行い、客家について論じている。このような日本や欧米において先行していた客家に関する論考も、その後の台湾での客家言説の中に反映されていくのであり、それらが国民党政権の文化政策という文脈の下で説明できるものではないというのは当然である。

中原から南遷してきた「歴史」を中心とするエスニックな概念としての「客家」は、中華民国が国際的に孤立していく時代において、台湾人に中国ナショナリズムを更に強く意識させようとしていた国民党政権の側が必要としていた歴史に適合する形で、海外での研究成果も取り入れつつ、台湾で流通するようになる。史跡会による「尋根」の活動に代表される、歴史に関する文化政策は、「客家」というエスニックな概念が流通するにあたっての良好な条件を造り出すのに貢献していた。このように、時代の要請にも沿った形で、エスニックな概念としての「客家」は受け入れられ、台湾の「客人」は自集団を客家と認識するようになったと考えられる。

### 第3節 客家意識の顕在化

前節までは文献上に現れる客家、あるいは「客人」に関する記述をとりあげ、彼らが自分自身をどのような集団と認識し、また他者から認識されてきたのかという問題を中心に考察してきた。エスニックな概念としての「客家」を受け入れた結果新たに構築された客家意識は、1980年代後半になり客家運動という形で顕在化する。

民主化が達成された台湾においては、各種社会運動が発生し、様々な集団が自分達の要求を訴えるようになった。台湾各地の客家人も共通の政治的権益を求めて共に行動するようになり、客家運動が発生するのである。社会運動が発生するのは、その集団にとって打破すべき不平等な現状が存在していると認識されるからであるが、台湾の客家にとって最も重要だったのは言語的な不平等という問題であった。そこでは、それまでの時期において主として論じられてきた移住の「歴史」の問題は、共通のアイデンティティーとして当然視され、具体的に解決されるべき言語の問題が運動の争点となっている。

1990年代後半に入ると、特に選挙の際に客家文化政策が積極的に示されるようになり、客家語メディアの設立、行政院客家委員会や地方政府の客家事務委員会の設立、客家関連施設の建設など次々と実現されていく。このように、客家運動の成果が制度化されていく中で、社会運動としての性格は薄れていく。そこで本節では、言語に関する問題を中心として、1990年代前半までの客家運動の経過をたどりながら、台湾においてどのように客家意識が顕在化したのか考察する。

## 1. 社会的背景

客家運動が発生するのは長期戒厳令が解除された後の 1980 年代後半のことであるが、ここではまず、この運動が起こされる要因となった社会的背景について考えてみる。

まず第 1 に戦後の言語政策である。戦後すぐの段階では、北京語と同じ漢語の系統に属するホーロー語・客家語<sup>46</sup>は制限すべきものとはみなされておらず、「国語」（北京語）を普及させ日本語を排除するために有用と考えられていた。「台湾省国語運動綱領六条」第 1 条では「台湾語を復元させ、方言との比較によって国語を学習する」としている。しかしこれは本当に「台湾語を復元」する意図があったのではなく、あくまで日本語を駆逐し「国語」を普及させるための手段として「台湾語」を捉えていたに過ぎない。

ある程度日本語の駆逐が進むと、今度はそれまで日本語の駆逐のために利用してきた「方言」の存在が「国語」の普及にとって邪魔なものとなり、「方言」は抑圧の対象になる。1956 年には「説国語運動」（国語を話そう運動）が開始され、各機関、学校、公共の場所での「国語」の使用が定められた。この規定はまだ「方言」使用の禁止を徹底するものではなかったが、1966 年に発表された「各県市政府各級学校国語強化推行計画」では、1) 各学校の教師と生徒はいつでもどこでも国語を使用しなければならず、違反した生徒は賞罰方式で処理する、2) 映画館で方言や外国語を流すことは厳禁、3) 街頭宣伝に方言や外国語を使用することがないよう厳重に忠告する、4) 運動会で方言を使用しての報告は禁止、5) 映画館で方言に翻訳されることがないよう厳重に忠告する、と規定された<sup>47</sup>。さらに 1976 年には「広播電視法」（ラジオテレビ法）が施行され、第 20 条では「放送局は国内放送での放送言語は国語を中心とし、方言は年々減少させなければならない。その比率は新聞局が実際の需要を見て決定しなければならない」と規定された<sup>48</sup>。

客家語はホーロー語や原住民語と同じく、戦後（戦前も同様であるが）「国語」政策の下、一貫して低い地位に置かれ続けてきたため、若い世代では母語が流暢に話せないものや、全く解さないものも増えてくるようになる。客家人集住地域を一步出るとほとんど通じず、また時折若干のラジオ番組が放送される程度でテレビ番組も皆無であった客家語が、話者人口の多いホーロー語と比べより大きな影響を受けていたことは容易に理解できよう。

第 2 に台湾ナショナリズムの台頭と「台湾語」の問題が挙げられる。1970 年代後半以来、政治の場では「党外人士」と呼ばれる勢力が徐々に力を持つようになっていった。彼らは国民党の中国ナショナリズムに対抗するために、1980 年代に台湾ナショナリズムの言説の構築を開始する。台湾ナショナリズムの言説は党外雑誌と大衆運動過程において繰り返し議論され、はっきりとした主流となる言説が徐々に現れた。それは、「台湾の人民は過去数百年にわたって入れ替わる外来政権の統治を受けてきたのであり、自らの命運を決定できる政治権力を持たなかった。国民党もまた台湾人民を抑圧する『外来政権』なのである。」というものだった。よって彼らは、「台湾人」が立ち上がって外来政権に対抗することによって初めて胸を張ることができ、政治においては自らが主となることができると訴えたのである<sup>49</sup>。

党外人士による反体制運動が進められる中で、ホーロー語にはそれまでとは違った意味が付与されることになる。上述したように、党外人士は国民党政権の中国ナショナリズムに、台湾ナショ

ナリズムによって対抗していったが、その象徴として用いられたのが「台湾語」すなわちホーロー語であった。つまり、中国ナショナリズムによって「国語」の使用を強制し、「中国人」であることを押し付ける「外来政権」の国民党政権に対して、台湾ナショナリズムによって「台湾人」として「台湾語」を使用して民主化を要求していったのである。そこでは、ホーロー語こそが「台湾人」の言語、「台湾語」とされ、象徴的に使用されるようになったのである。ホーロー語のこのような地位の向上は、国民党政権の中国ナショナリズムに対抗する上では大きな意味を持ったが、一方で客家人の立場から見ると、それまで「方言」として同じく低い地位にあった両者の関係が崩れたことを意味していた。そのため、「台湾人」の「台湾語」といったときに客家語が含まれないことに対して快く思わない客家人も少なくなかった。

このように、客家語を含む本土言語に対し抑圧的な言語政策への直接的な不満、そして民主化運動の進展に伴うホーロー語の地位向上が新たにもたらした不公平感が、客家運動という形で客家意識が顕在化する要因となるのである。

## 2. 客家運動の発生

客家運動の発端とされるのは、1987年10月25日に創刊され、その後の客家運動において主導的な役割を果たしていくことになる雑誌『客家風雲』の創刊である。この雑誌は、政治・経済・社会・文化・歴史・教育等、客家に関係する内容であれば何でも幅広く取り上げている。そして、政治的な立場としてはどの政党からも中立を保つとし、また特に敏感な問題である統独問題に関して特定の考え方を支持しないことで、あらゆる立場の客家人から支持を得ることが可能となった。また、客家風雲雑誌社の活動は『客家風雲』の発行以外にも、客家をテーマとした座談会やアンケート調査、学術研究討論会、夏期セミナーなどの活動も行った。『客家風雲』において、そしてその後の客家運動において最も重要なテーマとなったのは言語の問題である。台湾土着の言語は戦後の「国語」推進運動の下、一貫して低い地位しか与えられてこなかった。またメディアでの使用言語については、広播電視法によって「方言」の使用比率が制限されていたのに加え、特にテレビでは少ないながらも耳にすることのできる「方言」はホーロー語だけであるという事実もまた、客家人の不公平感を生み出す要因になっていた。1988年5月には行政院新聞局により「公共電視台設立法案」が提出され、公益性を備えた公共電視台において北京語とホーロー語の2言語による番組放送という政策が決議された。このことは『客家風雲』の読者、及びそれ以外の客家知識人に、長年の不合理な言語政策について考え議論を喚起する具体的なテーマを与え、客家運動が盛り上がる1つのきっかけとなった<sup>50</sup>。実際『客家風雲』では、このような客家語を取り巻く不公平な言語環境、そして客家語の流出が進んでいるという現状に対する深刻な危機感が表明され、政府の言語政策に対する批判が展開される。その具体的な要求として最も大きな関心を引いたものはテレビ放送における客家語番組の放送の要求であった。

客家語番組の放送に対する要求を受けて、新聞局は1988年11月に何度か座談会を開き、最終的には政治宣伝を行う客家語番組を毎週30分放送すると回答した。しかし座談会の後、政府は新聞を利用して、客家人が言語権益を争奪しようとし客家語テレビ番組の放送を要求するのは正

しくないという報道を行ったのである<sup>51</sup>。

1988年には客家權益促進会が発足した。この会は客家風雲雑誌社の人員を中心としていたが、他にも世界客属総会やその分会、世界客属文教基金会、各縣市旅北同郷会、大專客家青年聯誼会、中原週刊社、その他いくつかの非客家のマイノリティー団体も加わり、12月28日のデモ行進参加を各地の客家人に呼びかけた<sup>52</sup>。当日には、政治的な立場を超えて多くの客家関連団体の協力により6~7000人ものが台湾各地から集まり、「客家語テレビ番組の全面開放、広播電視法第20条の方言に対する制限条項を保障条項への改正、多元的・開放的な言語政策の確立」を訴えた<sup>53</sup>。「還我母語運動」(我に母語を返せ運動)というデモ行進が台北で実施された。ここでは、運動の基本態度として次の5項目が掲げられた<sup>54</sup>。

- ① 母語は人間の生まれながらの尊厳であり、貴賤高低による分け隔てはなく、完全なる母語権を主張する目的は人間としての完全なる尊厳を守るためである。
- ② これは客家人が母語の尊厳と言語集団の継続を守る運動であり、故にその目的は台湾社会の人間集団の分類運動ではない。
- ③ 原住民言語、客家語、ホーロー語等を含む台湾本土言語は皆現行の言語政策の下、抑えつけられてきた。よって台湾の言語政策が真の民主的な手段を通して批判され作り直された後にのみ、本土の平和的な言語生態が実現され、我々の目標はまさに達成されるのである。
- ④ 我々の運動の基礎はもちろんいかなる形の暴力も放棄し、社会に対する多元価値の承認と人権平等に対する信仰と擁護の上に立っている。
- ⑤ 言語は権利義務を解釈する道具であると同時に、文化的価値を含むものでもある。それゆえ、平等で平和的な言語生態というのは、単に民主政治の礎となるだけではなく文化体系を豊かで大きなものにする助けともなるのである。

「還我母語運動」は客家人の政治的權益、特に言語における權益の主張が中心だったが、狭隘で排他的な運動になることを避けるため、この基本態度は、同じく言語的に抑圧を受けている他の族群にも配慮した内容になっており、言語の平等と多元的文化価値への支持を広く訴えている。その結果、労工運動支援会、原住民権利促進会、台湾環境保護連盟等といった本来客家とは無関係の団体も応援に駆けつけたのである。そして、孫文を名誉総隊長としたデモ隊は、国父記念館で孫文に祈願した後デモ行進を開始し、立法院、行政院と回り請願書を手渡した<sup>55</sup>。

この運動の後、1989年1月1日午前8時から初の客家語番組となる「郷親郷情」が台湾テレビで30分間放送された。この番組は、「政令宣伝」「客家風情」「ニュース」「ことわざ・歌謡」の4つからなっており<sup>56</sup>、以降この番組は毎週日曜日に放送されることになった。

初期の客家運動を主導してきた『客家風雲』は内部の意見対立により1989年にはもとのメンバーはほとんど辞めてしまい、大学教授を中心とする知識人によって引き継がれ、1990年1月に雑誌名は『客家』と変更された。そこでは基本的に政治的に敏感な話題は避けられ、文化や民俗といった内容が中心になった。そうすることにより、政治的な争いによって雑誌の運営に支障をきたすことのないようにしたのである。

1990年12月1日には台湾客家公共事務協会（以下、台湾客協）が成立する。台湾客協の成立大会において理事長の鍾肇政は「新しい客家人」という理念を提唱する<sup>57</sup>。

私は客家人が心の中に洪秀全や孫文、鄧小平、リー・クワンユー、或いは李登輝がいることに反対はしません。しかしもっと重要なのは、これらの人物の名前を挙げて得意になることではなく、他の語族の人の前で胸を張って客家語を話すことができるか、そして家の中で自分の母語を次の世代に伝えることができるかということです。……もしこれに賛同し、そして本当に実行するなら立派な現代の客家人であります。つまり新しい客家人なのです。……新しい客家人が増えた後は、客家人は必ずその潜在能力を発揮し、客家人全体のため、台湾全体のために貢献してくれるものと信じています。……他の族群と一緒に誠意を持って協力し、台湾の民主の前途のために努力しましょう。

つまり客家の偉人を自慢することに客家人としての心の拠り所を求めるでもなく、また少数者として卑屈になるでもなく、台湾人の一員として胸を張り台湾の民主化に主体的に関わるべきであるというのである。そして明らかに中国ではなく台湾に対して国家意識を持ち、その上に客家人としてのアイデンティティーを確立させようとする意図が読み取れる。また、この時期の客家運動における批判の矛先は政府の言語政策に対してだけではなく、ホーロー人の考え方に対しても多く向けられるようになる。ホーロー人のことを台湾人と称し、ホーロー語のことを台湾語と称してはばからないホーロー人の態度をホーローショービニズムと批判し、客家人も台湾人である、客家語も台湾語であるという主張を展開するのである<sup>58</sup>。

台湾客協は「新しい客家人」という理念の下に様々な活動を行った。出版活動や全国紙での記事掲載、客家専門書の出版に加え<sup>59</sup>、大学や専門学校での客家社（客家サークル）の設立にも協力し、経費上の補助や会員の派遣を行った<sup>60</sup>。また、学術界においては客家研究討論会を主催し、一般向けには1991年5月から1993年9月まで台湾各地で計15回の講演会や文化講座を開催し、「新しい客家人」の理念を広め、客家人としての意識を喚起するために奔走した<sup>61</sup>。

政治運動の世界から手を引いた客家雑誌社とは対照的に、台湾客協は政治運動にも積極的に参加する。1993年末の県市長選挙に向けて、台湾客協は10月22日に新客家助選団を成立させ、族群・地域・党派に関わらず、台湾の民主化・現代化を加速させ族群の平等・共存共栄を促進させる候補者に対して無条件で応援演説を行うとした。そして11月2日から18日にかけて、台北県の尤清、宜蘭県の游錫堃、新竹県の范振宗、屏東県の蘇貞昌、高雄県の余政憲らに対し計13回、客家人の集まる場所で応援演説活動を行い、その多くは客家語で行われた<sup>62</sup>。1994年末の第1期民選省長・直轄市長選挙、省市議員選挙を前に台湾客協は、全国部分では新客家助選団の名称で活動し、台北市部分では陳水扁客家界後援会を成立させた。台湾客協が陳水扁を応援することにした理由は、陳水扁が5項目の客家政策を公約したためであった。その5項目とは、1) 客家語専門ラジオ局を設立する、2) 台北市客家発展史を編纂する、3) 小中学校において母語教育を推進する、4) 年1回台北市客家文化節を開催し客家文化が平等な地位にあることを喚起する、

5) 客家文物館を設立する、というものであった。これにより台湾客協は陳水扁の客家票獲得に全面的に協力し、3 度に及ぶ「新台北客家之夜」などを通して、台北の客家人に対して陳水扁支持を訴えた<sup>63</sup>。

### 3. 客家運動と台湾人意識

次に、客家運動で顕在化したアイデンティティーにおける国家意識について考えてみたい。エスニックな概念としての客家は、国民党政権が国家的危機に瀕する中で、大中国主義的な歴史観を植えつけようとする時代に流通していったものであり、そこで共有された客家の「歴史」とは中原に起源を持つものだった。そのことから考えると、客家人という意識は台湾人意識とは結びつきにくいもののようにも感じられる。

しかし、そもそも台湾の客家運動は、台湾ナショナリズムによって国民党政権に対抗した反体制運動によって決定付けられた民主化・台湾化の流れが進行する中で発生した運動であり、客家運動を主導した団体は、客家風雲雑誌社にしても台湾客協にしても明確な台湾人意識を有していた。客家運動の原動力は客家語の流出に対する危機感であったため、初期の客家運動における中心的言説となったのは、政府に対する抑圧的な言語政策の是正の要求、特に広播電視法第 20 条などに代表されるメディアでの「方言」使用の制限を改めさせ、客家語のテレビ番組を放送するよう訴えたものだった<sup>64</sup>。そして、「他の語族の人の前で胸を張って客家語を話し、「自分の母語を次の世代に伝えることができ」、「客家人全体のため、台湾全体のために貢献」する「新しい客家人」という理念はまさしく台湾に根を張った台湾人の一員として確固たる地位を占めるといふ意志の宣言である。

もちろん、国家意識という点では客家人全員が台湾にアイデンティティーを有しているわけではない。例えば民主化以前から存在している客家の団体として有名な世界客属総会という親睦組織があるが、これは台湾においては国民党との関係が深い団体であり、国家意識に関しては台湾客協などとは相当の開きがあるだろう。客家運動においては、世界客属総会も「還我母語（母語を返せ）運動」ではデモ行進の一員として名を連ねているし、それ以外にも客家語テレビ番組の放送についての請願や、講演会や文化講座の主催など、客家文化保護に関する運動を行っている。しかし、それらはいずれも『客家風雲』によって客家語の流出に対する危機意識が喚起され、関連する様々な活動が行われるようになる中での活動であり、客家運動はこのような団体が先頭に立って進められたものではなかった。

では、外省人の客家はどうであったか。外省人の中にも広東省や福建省出身の客家は少なくない。彼らは、「四大族群」（或いは最近では「五大族群」か）という言説においては「外省人」に分類されるが、広義には客家であることには変わりない。そのような人々が同じ出身地の移住者どうしの親睦を図るために組織された同郷会は数多く存在している。しかし現在では、1 世会員の高齢化が進む一方で 2 世や 3 世になると、1 世の故郷への帰属感も薄れてきているという。このような組織が客家運動に積極的に参加した形跡は見られないことから、外省人客家は台湾の客家運動の主体には含まれなかったことが伺えるだろう。

同様に、中国大陸や海外に住んでいる客家と連携した活動というのもほとんど見られない。世界客属総会による世界的な親睦の大会などは継続的に行われていたものの、これらと 1980 年代後半になって開始されたこの客家運動とは特に関係しているわけではなかった。もっとも、運動を進めた側が積極的に排除していたというわけではない。例えば「還我母語運動」では、梅県の県長がデモに参加したいという意志を表明している。結局、共産党員は台湾に入ることができなかったため実現はしなかったが、「梅県客家代表」として海外客属声援団体に名を連ねた<sup>65</sup>。しかしこれ以外に台湾での客家運動において、言語を中心とする客家の権益拡大のために中国大陸や海外の客家と連携するという動きはほとんど見られない。台湾における客家運動は、基本的には台湾のみを地理的範囲とし、言語の問題を主たる争点として台湾客家の権益拡大を主張した運動だったのである。

## おわりに

台湾における客家に関する言説の量的・質的変遷は、台湾社会そのものの変化と強く連動していた。客家アイデンティティーは、戦後から民主化後に至るまでの台湾における政治状況の変化や社会的な価値の転換を背景として形成や変容が生じたものであり、政治的・社会的な要因に適応する柔軟性を持つものであった。

中原に起源を持つという客家の「歴史」は、現在でこそ広く知られているが、戦前の台湾に関する資料を読む限りは、そのような「歴史」が昔から一般的であったとは言い難い。「歴史」を核とするエスニックな概念としての「客家」は、国家的危機に立たされた国民党政権が中国ナショナリズムの植え付けを目指す文化政策を推進する時代に流通したものであった。その結果、台湾の「客人」は自集団を客家と認識するようになるのである。しかし、民主化が達成された後、客家意識は客家運動という形で顕在化するが、この客家運動は台湾を地理的範囲とし、民主化運動に端を発する台湾ナショナリズムの影響を強く受けたものだった。

台湾の客家人は確かに、中原から南遷してきたという「歴史」を自らのルーツとして認識するようになった。その点では、台湾の歴史源流を全て中国大陸に求めるという考え方と一致する形で客家の「歴史」を受け入れた。しかしながら、台湾人は中国大陸にルーツがあり中国人としての意識を強く持つべきとする統治者側の意図とはうらはらに、客家運動において見られたアイデンティティーは、台湾ナショナリズムの影響を受け、台湾人意識に基くものへと変貌を遂げていた。

もっとも、台湾の客家人は、中原から南遷してきたという「歴史」を自分達のルーツとしてそのまま受け入れているように、「客家」というエスニックな概念そのものは全く否定していない。そのことを図らずも象徴しているのは、族群を表す名称かもしれない。原住民は戦後になると「山地同胞」と呼ばれるようになったが、原住民運動を通じそのような漢族の視点からの名称を改めさせ、自ら「原住民」と名乗った。ホーロー人は、戦後になって「閩南人」と呼ばれるようになった。「閩南人」という名称は現在でも使用されているが、この名称は国民党政権によって付けら

れたもので本来あるべき名称ではないという考えから好まない人も多い。また、最近では外省人の代わりに「新住民」という名称を使うケースも見られる。しかし、客家だけは、この名称も台湾では戦後になって定着した名称であるにもかかわらず、客家という名称を変えるべきだという主張は耳にしたことがない。

現在の台湾においてほとんど疑われることのない、客家が中原から南遷してきたという「歴史」は、実は古くから共有されていたものではなかった。そしてこの言説は、政治的・社会的要因と密接に関係しつつ、台湾で流通し、受け入れられ、さらには台湾独自の客家アイデンティティーの中に吸収されていったものだった。

## 注

- 1 羅香林『客家研究導論』1933年、(影印版、上海、上海芸文出版、1992年) 12-14頁。なお、羅は同書 12-14頁において「いわゆる華人というのは、そもそも「純粹」な血統といえるものなどない。……南系の漢族は……混化の程度は深いものもあれば浅いものあるとはいえ、あるいは北系の漢族の混化のひどさには及ばないとはいえ、純粹な漢族ではないということは全く疑問の余地がない。客家に至っては、外族との混化がいくらか少ないとはいっても、これもいくらか少ないというだけの話であり、「純粹」というのとは別である。」と述べており、客家は血統的に完全に純粹な漢族と主張しているわけではない。
- 2 本稿では客家語、ホーロー語語彙のアルファベット表記は教会ローマ字式を使用し、声調符号は省略する。
- 3 黄栄洛「漫談 客家人的幾個詞彙」『客家』第6期、台北、客家雜誌社、1990年、59頁。
- 4 「ホーロー」は漢字で書かれる場合は「福佬」、「鶴佬」、「河洛」等と表記される。なお、「ホーロー人」、「ホーロー語」はそれぞれ「閩南人」、「閩南語」とも称される。
- 5 台湾総督官房臨時戸口調査部『第二次臨時台湾戸口調査記述報文』台北、1918年、280頁。
- 6 連横『台湾通史 中冊』台北、台湾通史社、1920年、636頁。
- 7 李坪生「閩族婦人と粵族婦人」『台湾慣習記事』第2巻第7号、台北、台湾慣習研究会、1902年、44-47頁。
- 8 小川琢治『台湾諸嶋誌』東京地学協会、1896年、167-171頁。
- 9 小川は Pinton, M. ch.としているが、Piton の誤りであろう。
- 10 読史生「客家とは何ぞ」『台湾慣習記事』第5巻第6号、台北、台湾慣習研究会、1905年、533頁。
- 11 参謀本部編纂課編輯『台湾誌』参謀本部、1895年、80頁。
- 12 同上、81頁。
- 13 小川琢治、前掲書、168頁。なお、「シヤクピヤク Syakpyak」とは石壁のことである。黄巢の乱にさいして、客家の祖先が難を福建省寧化县石壁洞あるいは葛藤坑に避けたという伝説が、客家、特に広東の客家の間には広くひろがっている(牧野巽『牧野巽著作集第5巻 中国の移住伝説広東原住民族考』御茶の水書房、1995年、84頁)。
- 14 仲摩照久編『日本地理風俗大系 15 台湾篇』新光社、1941年、168頁。
- 15 菊池秀明「マージナルな人々の系譜と伝説——広西における漢族と非漢族のあいだ」『アジア遊学』67号、勉誠出版、2004年、22-31頁。
- 16 林玉茹、李毓中著、森田明監訳『台湾史研究入門』汲古書院、2004年、293頁。
- 17 黄文瑞「台湾省文献委員会沿革」『台湾文献』第45巻第2期、台北、台湾省文献委員会、1994年、201頁。
- 18 莊金徳「台湾省文献委員会設立的沿革」『台湾文献』第19巻第4期、台北、台湾省文献委員会、1968年。
- 19 黄文瑞、前掲論文、201頁。
- 20 林献堂「弁言」『文献』第1巻第1期、台北、台湾省文献委員会、1949年、5頁。
- 21 各縣市においても、台南市、高雄市、澎湖県の文献委員会は1951年10月に、それ以外の県市の

- 文献委員会は1952年から1953年にかけて続々と設立された。
- 22 林奇龍『台湾史跡源流研究会之研究』中壢、国立中央大学歴史研究所修士論文、1999年、42-43頁。
  - 23 王国璠「沿革——台湾史跡源流研究会與台湾史跡研究中心」中華民國台湾史跡研究中心研究組編『台湾史跡源流研究会創辦二十週年・台湾史跡研究中心設立一五周年 紀念特刊』台北、中華民國台湾史跡研究中心、1990年、8頁。
  - 24 同上。
  - 25 林奇龍、前掲書、44頁。
  - 26 王国璠、前掲論文、9頁。
  - 27 林奇龍、前掲書、77-79頁。
  - 28 当初は政治色の強かった内容であるが、徐々に中国と台湾の関係を強調するものではなくなっていき、扱われる内容も多岐にわたるようになる。特に台北市文献委員会主催のものでは、1994年に民進党の陳水扁が台北市長に当選したことによって課程の内容は大きく変更され、初期のような民族精神教育的ではない、台湾史を中心とした学術的なものになった（同上、80-82頁）。
  - 29 謝嘉梁、黄宏森「台湾史跡源流活動之今昔意義」『台湾文献』第49巻第2期、南投、台湾省文献委員会、1998年、150-151頁。
  - 30 林奇龍の曹美良へのインタビューによる（林奇龍、前掲書、164頁）。
  - 31 林奇龍の洪敏麟へのインタビューによる（林奇龍、前掲書、167頁）。
  - 32 陳逸君主編『台湾客家関係書目與摘要（專書、論文、研究報告類）上冊』南投、台湾省文献委員会、1998年、41頁。
  - 33 林熊祥主修『台湾省通志稿』「人民志語言篇」台北、台湾省文献委員会編纂組、1954年、4665頁（成文出版社、1983年、影印版）。
  - 34 古福祥纂修『屏東県志』「卷二人民志」屏東、屏東県文献委員会、1965年、796頁（『屏東県志』台北、成文出版社、1983年、影印版）。
  - 35 「緒言」『中原文化叢書（一）』苗栗、中原雜誌社、1965年。
  - 36 同上。
  - 37 陳逸君主編、前掲書、36頁。
  - 38 陳運棟『客家人』台北、東門出版社、1978年、4頁。
  - 39 同上、403-308頁。
  - 40 「世界客属第二次懇親大会計画綱要」第一条からの引用文（陳運棟、前掲書、408頁）。
  - 41 羅香林、前掲書、97-98頁。
  - 42 同上、170-172頁。
  - 43 陳運棟、前掲書、69頁。
  - 44 中川学「中国客家史研究の新動向」『一橋論叢』第77巻第4号、1977年、71頁。
  - 45 戴国輝「中国人にとっての中原と周辺」橋本萬太郎篇『漢民族と中国社会』山川出版社、1983年、408頁。
  - 46 「台湾語を復元させ、方言との比較によって国語を学習する」という文言における「台湾語」とは主にホーロー語を念頭においていると思われるが、「方言」からの比較によって「国語」を学習するというのは客家語についても同様であるため、ここでは客家語も併記した。
  - 47 陳美如『台湾語言教育政策之回顧與展望』高雄、高雄復文図書出版社、1998年、63頁。
  - 48 黄宣範『語言、社会與族群意識——台湾語言社会学研究』台北、文鶴出版有限公司、1995年、362-370頁。
  - 49 王甫昌『当代台湾社会的族群想像』台北、群学出版、2003年、95-96頁。
  - 50 謝文華『客家母語運動的語芸歷程』新莊、輔仁大学大衆傳播学研究所修士論文、2002年、57-60頁。
  - 51 曾金玉『台湾客家運動之研究（1987-2000）』台北、台湾師範大学公民訓育研究所修士論文、2000年、105頁。
  - 52 同上。
  - 53 楊長鎮「街頭運動的新典範」『客家風雲』第15期、台北、客家風雲雜誌社、1989年、16頁。
  - 54 『客家風雲』第15期、台北、客家風雲雜誌社、1989年、57頁。
  - 55 楊長鎮、前掲論文、18-21頁。

- 
- 56 張致遠「電視客語節目的現況與改進」徐正光、彭欽清、羅肇錦主編『客家文化研討會論文集』1994年、185-187頁。
- 57 鍾肇政「客家話與客家精神——台灣客家公共事務委員會成立講詞」台灣客家公共事務委員會主編『新个客家人』台北、台原出版社、1991年、82-83頁。
- 58 謝文華、前掲書、86-93頁。
- 59 蕭新煌、黃世明『台灣客家族群史 政治篇 (上)』南投、台灣省文獻委員會、2001年、225頁。
- 60 同上、223頁。
- 61 同上、228-233頁。
- 62 同上、234-236頁。
- 63 同上、238-240頁。
- 64 謝文華、前掲書、55-77頁。
- 65 「遊行万花筒」『客家風雲』第15期、台北、客家風雲雜誌社、26-27頁。